

K 啓蒙期ヨーロッパの歴史叙述

世話人：小谷英生（群馬大学）、網谷壮介（立教大学）

報告者：安藤裕介（立教大学）、稲垣健太郎（東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員）

討論者：安武真隆（関西大学）

<網谷壮介報告>

本セッションでは、昨年度に引き続き、啓蒙期ヨーロッパの歴史叙述の国際比較を行った。今回は、とりわけヨーロッパにおける〈他者〉の翻訳・転移（translation）の問題を、ジョン・セルデンを中心とするイングランドの議論、そしてモンテスキュー・ヴォルテール・ケネーらフランス啓蒙の議論のうちに確認した。

まず安藤報告では「『東洋的専制』という他者表象をめぐって」への題目変更があり、主にモンテスキューの専制論が取り上げられた。彼の専制イメージは『ペルシア人の手紙』（1721年）と『法の精神』（1748年）で具体的に描かれているが、その原型はJ・シャルダンの『ペルシア旅行記』（1711年）に見出すことができる。しかし、シャルダンの旅行記はもっぱらペルシアやトルコを「東洋的専制」として扱う議論であり、それに影響された『ペルシア人の手紙』にも中国論はほとんど登場しない。ところが『法の精神』では、もともとペルシアやトルコに見出された「東洋的専制」の概念が中国にも投影されることで、政体分類の内容と中国記述との間で微妙な齟齬や歯切れの悪さが目立っている。ヴォルテールとケネーは、このようなモンテスキューの中国像に対して反論を加え、逆にその統治体制を高く評価することになった。結果的にモンテスキューの「東洋的専制」論は、フランス啓蒙における中国像の微妙な取り扱いの遠因ともなり、また19世紀以降のヨーロッパの歴史叙述にも大きな影響を与えた。安藤氏の報告に対しては、討論者である安武氏より、①古代ギリシア以来、ある種のオリエンタル・デスポティズム論は存在しており、モンテスキューの「東洋的専制」概念もこの手のステレオタイプの再生産ではないのか、②本報告は翻訳とどう関連するのか、という批判・疑問が提起された。これに対し安藤氏は、たしかにステレオタイプの再生産といった側面もあるが、モンテスキューの参照したシャルダンがペルシア語に堪能で、長年の現地滞在経験もありながら、しかしステレオタイプを再生産したことは検討に値する、と応じた。

他方、第二報告者である稲垣氏は「セルデンにおけるアラブ的他者」という報告を行った。同報告では、17世紀イングランドの法学者、東洋学者であるジョン・セルデンを中心に、当時の東洋学者たちが「アラブ的他者」をいかに表象し、自身の帰属する教会を正統化したのか、という問題が扱われた。アラビア語で記されたキリスト教会の年代記やイスラーム側の歴史叙述を解した論者たちは、翻訳を通じて、イスラームをキリスト教内部の宗派對立のなかで相対する宗派を指弾するための「根拠」とした。ときにこうした営みは、

アラビア語からラテン語への翻訳によって生じる概念の表面的な重なりに依拠したものに過ぎなかった。こうした脈絡においてセルデンは、キリスト教とイスラームのあいだに見られる概念の重なりを根拠に両者を安易に結びつけることを避け、他方で「アラブ的他者」による西欧のキリスト教表象にも注意を向けた。とりわけ、破門や教会職務のヒエラルキーに懐疑的な立場をとったセルデンにとり、「アラブ的他者」による西欧のキリスト教表象は自らの見解を補強する材料にもなり得た。同報告は、他者の表象を通じてキリスト教会の制度を検討し、あるべき教会の姿を求めることがセルデンの意図であったと結論した。稲垣氏の報告に対しては、安武氏より以下のような批判・疑問が提起された。第一に、イスラーム教徒とアラビア語を用いたキリスト教徒とを「アラブ的他者」という概念で一括りにすることは難しいのではないかと、という批判が寄せられた。二点目として、報告で検討した論者たちが同じテキストに対して施した翻訳の異同を論じるべきではないか、という疑問が示された。第三に、本報告と歴史叙述のつながりに関する疑問が提示された。この疑問は、教会史との連関を示唆するものであり、今後より深く検討すべき問題であると言える。

また、フロアからは稲垣氏の報告に対して、イスラームを他の党派的な神学者らに比して、なぜセルデンがかくも正確にイスラームを理解しようとしたのか、その意図についての質問があった。これに対し稲垣氏からは、セルデンの意図を理解するためには、コンフェッショナルリズムにおける政治的立場を踏まえる必要がある一方、純粋に知的的好奇心に突き動かされたものである可能性が示唆された。

二日目 10 時からの開始であったにもかかわらず、30 名近い参加者にお越しいただき、知的刺激に満ちたセッションになったように思われる。次年度以降もヨーロッパ啓蒙の歴史叙述をテーマとしてセッションを継続していく予定である。

<小谷英生報告>

本セッションでは18世紀啓蒙——1630年頃から1830年頃までの幅を持つ長い18世紀——におけるヨーロッパの歴史叙述の国際比較を通じて、そこで用いられた新しい歴史的カテゴリーとロジックを、政治的な行為遂行性、哲学的議論との関連を含め追究している。

今年度は、翻訳・転移（translation）を通じて、「他者」がどのように表象されていたのか、フランスとイングランドの事例から検討した。

まず安藤裕介氏による報告「戦略としての他者表象——モンテスキュー、ヴォルテール、ケネーの中国像」が行われた。そこではヴォルテールや重農主義者たち、イエズス会宣教師といった人々の言説を探求し、Despot と Tyran 概念というカテゴリーがアラブと中国に対していかに適用されていたのかが分析された。そしてこれらの概念を用いることによって、啓蒙のフィロゾフたちはとりわけアラブ表象の中に自国の現体制批判を行っていたことが明らかになる。ただし、アラブに対して（翻って自国に対して）批判的な含意のあった Despot と Tyran 概念は、中国表象に用いられる場合にはその含意を失っていく。

このことはすなわち、政治体制と社会の富裕との間には必ずしも期待されたような法則的結合が存在しないか、少なくとも中国は例外として扱われなければならなかったことを意味している。

加えて注目すべきは、19世紀的な世界史表象とは異なり、中国は未だ歴史化されていなかったことである。中国は未だ歴史の一段階を示す社会と考えられていなかったのであり、それゆえ歴史叙述の中に組み込まれていなかった。旧体制下のフランスにおいて中国は統治改革を議論する際の重要な情報源・参照点となっており、啓蒙思想家の間で様々な評価を与えられていたが、発展しつつある歴史的思考の中で大きな位置を与えられていたわけではないように思われる。この点は今後の研究の進展が待たれる。

次に、稲垣健太郎氏による報告「セルデンにおけるアラブ的他者」が行われた。まず指摘されたのは、初期近代の東洋学は基本的にキリスト教の敵としてのイスラームを論駁するために研究される傾向があったことである。しかし17世紀半ばに活躍した東洋学者たちは、アラブの神学者たちの議論を自身とは異なる宗派を批判するために用い始める。こうしたコンテクストの中にJ・セルデンの東洋学・教会史研究を位置づけ、初期近代における他者表象と翻訳を通じた自己の表明のあり方を明らかにすることが発表の目的であった。

セルデンは、一方ではキリスト教とイスラームのあいだに見られる概念の重なりを指摘する。しかし、セルデンにとってイスラーム教徒がキリスト教において用いられる概念を有することは、両者を安易に結びつける根拠とはならなかった。セルデンはむしろ、イスラーム教徒やアラビア語を用いたキリスト教徒の文献を援用することで、アラブ的他者によるキリスト教表象にも注意を向ける。すなわち、アラブという他者の表象（キリスト教徒によるイスラーム表象と、アラブによるキリスト教表象という二重の関係）を通じてキリスト教会の制度を検討し、あるべき真の教会を求めようというのがセルデンの東洋学研究の目的だったのである。

稲垣報告においてはセルデンの仮想敵、直接的・間接的に介入した同時代の議論といったコンテクストがいささか曖昧であり、セルデンが東洋学に向かったモチベーションを明確にすることが求められたが、諸宗派對立の最中でキリスト教の真の教会を確立するために、むしろ西洋世界の外に突破口を見出そうという戦略を浮き彫りにしたことは重要な研究成果である。

全体の討論においては、安武真隆氏による博学多識なコメントを賜った。また、各報告に対する細かな質問も多く出たが、特筆すべきは両報告と歴史叙述との関係に向けられていたように思う。どちらの報告も世界史的思考の萌芽的段階における非歴史的な他者表象を論じており、セッションのテーマとの関係が分かりにくかったことは否めない。

しかし、いわゆる後期啓蒙の時代を席卷する歴史的思考——もちろんそこでも中国やアラブは周辺に置かれていたが——の手前で、西洋社会が他の社会をいかに表象していたのか、そしてその表象を通じて自らをいかに改革しようと努めていたのかを明らかにした点で、両報告は「啓蒙期ヨーロッパの歴史叙述」というテーマにとって重要な研究であった。